第 19 期京都教師塾　塾生通信

学びの広場

京都市教育委員会
教員養成支援室
令和６年 12 月 21 日　No.6

今回は模擬授業を伴う講座でした。講義では、道徳科を通して「自己の生き方」や「人間としての生き方」について考えを深めること、模擬授業では、教材の「ヤマ場」を見極めた上で中心発問を考えたり「自分事」として捉えられる「めあて」を考えたりすることの大切さを学ぶことができました。

仲間のレポートに学ぶ

第５回京都市教育学講座　小学校専門講座
小学校における教科学習(道徳)　～自ら育む授業づくり～　を受講して

今回の講義で学んだことは、道徳科は教材の内容を理解する共通解で終わるのではなく、自分事として考える納得解へと繋げることが大切であるということだ。この話を聞くまで、私は、教材から読み取れることをその登場人物の立場になって考え、深めていくことが重要だと思っていた。そのため、事前課題でめあてを考えるときに、国語科で立てるめあてのようだという印象を受けたが、これは「教材から読み取れる共通解を理解する」という児童の姿をゴールとしていたからだと分かった。講義後に事前課題を見直すと、自分事で考える道徳科の大切さを児童に伝えることなく、学びが半減してしまうような授業展開になっており、反省した。

講義の中の模擬授業では、工夫された板書が印象的だった。紹介の中にあった「動く板書」は、先生の教材研究への熱意が感じられたが、他の授業もある中で道徳にだけ時間をかけて教材研究をするわけにはいかず、毎回このような板書を行うことは難しいだろう。支援員として行かせていただいている小学校では、教科書に載っている挿絵を印刷して、板書で使っている先生がいた。挿絵は重要なポイントであることが多く、登場人物の表情や行動を見ながら、考えを深めてほしいという先生の意図が込められているように感じた。これくらいであれば準備できそうなので、分かりやすい板書づくりのために活用してみたいと思う。

分散会では、それぞれが取り組んできた事前課題について交流することで、自分にはなかった見方・考え方があり、悩む部分が多くあった。めあてにおいては、どのようなめあてにするかといったことはもちろんだが、文末を「考えよう」にするのか「だろう」にするのかで児童に与える印象が異なるのではないかという話し合いがあり、児童目線に立って考える大切さを改めて理解することができた。中心発問においては、教材の中にはいくつも発問に出来る場面があるため、めあてと繋げて考えたときにどの発問が一番良いのか、そのクラスの児童の実態に合ったものになっているかという部分に注目することが大切だと分かった。めあてに繋がっていても、クラスの実態に合っていなければいい中心発問とは言えないため、めあてからクラスの実態に合ったものを立てることが大切になると考える。

道徳科の授業がこれまでの認識と違ったと気付き大切なことが学べました。共通解、納得解という言葉によって道徳科で求める授業の在り方がよくわかりましたね。国語科との違いは授業の着地点が内容項目に沿って自分事として考えることです。早速自分の事前課題について反省できたことは素晴らしい！反省は前進ですよ。板書はたくさん工夫できます。掲示物の準備だけでなく、登場人物の心情（悩み、葛藤）を色分けや線で可視化したり、書き方を黒板の右→左だけでなく左右→中央にしたり。子どもの思考の助けになる工夫をしましょう。めあても発問も基本は子どもの実態把握から反応を予測して決めていきます。どの子も思わず考えたくなる授業にしたいですね。

～クラス担当スタッフからのコメント～

仲間のレポートに学ぶ

第5回京都市教育学講座　中学校専門講座
生きる力を育む道徳教育　～自らを律する力を育む授業づくり～　を受講して

今日の講義や分散会での話で「中心発問」について深く考えることができた。今回の事前課題や実習で道徳の中心発問を考えるときに何を中心発問にしたらいいのか全く分かっておらず、「なんとなく」で決めていることが多かった。しかし講義で登場人物の道徳性の高まりに着目して考えるとポイントが見つけやすいことが分かった。ポイントとなる「教材のヤマ場」を見つけたらそれが「誰が」「何によって」「どのように」変化したのかをつかむことで中心発問を作っていけるということが分かった。分散会ではGAの先生が「質問」と「発問」の違いについて話してくださり、中心「発問」であるからにはその発問で生徒の多様な考えを集められるような問いでないといけないことに気づくことができた。それを踏まえてもう一度中心発問を考えると問いとしてはほとんど同じになったが、「なんとなく」ではなくしっかりとした意図を持って問いを出せるようになった。それによって予想される発問に対する生徒の答えも想像することができ、より授業展開を深められると感じた。また、予想される答えを考えることができたらそれをさらに深める「問い返しの発問」があることを知れた。次回道徳の指導案を考える際はそこまで考えられるようにしたい。とはいえすべての答えを予想できるはずもなく、予想外の答えが出たときは答えた以外の生徒も巻き込んで教師も生徒も一緒に考えることを意識すると進めやすいことが分かった。

分散会の話し合いでは中心発問の後に自分が「ぼく」なら卓也にどのように話しかけるかという役割演技をすることによってさらに自分の考えを反映させたり、言葉では表せない想いも乗せて表現したり、卓也役をすることで「ぼく」の気持ちを受け取る側の視点に立つことができた。そうすることによって勇気を出して言い出してくれたことに対しても裏切られたからと突き放すのではなく、受け入れるという選択肢を考えられるようにしたいと思った。その他には「ずるい」を中心発問で考えることで良い悪い以外の観点からアプローチする意見が出た。確かに「ずるい」に関してはどう扱えばいいかわからないところがあったので、今回中心発問としていたところを補助発問にすると自分の中心発問にも繋げられると思った。

道徳教育の基本的な考え方や模擬授業を通して教師目線と生徒目線から考える講座でしたね。「中心発問」について深く考えることができたようですね。ポイントとなる「教材のヤマ場」を見つけることや、「質問」と「発問」の違いにも目が向けられていますね。「その発問で生徒の多様な考えを集められるような問いにしてく」ことに気づきがありましたね。分散会では、実際に卓也役をすることからの学びもあったようですね。これらの学びをいかして、この教材で自分自身が授業をしている様子を思い浮かべ、実際の場面での子どもとの活動をイメージして、実践に繋げていきましょう。

～クラス担当スタッフからのコメント～

分散会の様子

講義で学んだことを活かしながら、模擬授業とは異なる教材の「めあて」や「中心発問」を考えました。教材文や学習指導要領解説を読み直したり、児童生徒の姿を想像したりしながら、「めあて」や「中心発問」を吟味している姿が印象的でした。

次回は、 京都市教育学講座⑦
高等学校専門講座、養護教諭専門講座、総合支援学校専門講座、栄養教諭専門講座

4つの校種・職種に分かれての講座になります。それぞれの校種・職種に特化した専門的な知識や現場での実践について学ぶことができます。教師は、それぞれの校種のつながりを意識したり、様々な職種の人と連携したりする中で、児童生徒を育成していきます。そのため、自分の志望に該当する塾生はもちろんのこと、志望する校種・職種でない塾生にとっても、今後における大きな学びとなる講座です。